

2025. 4. 27 (日) ルカ24:13~27

24:13 ところで、ちょうどこの日、弟子たちのうちの二人が、エルサレムから六十スタデ
イオン余り離れた、エマオという村に向かっていた。

24:14 彼らは、これらの出来事すべてについて話し合っていた。

24:15 話し合ったり論じ合ったりしているところに、イエスご自身が近づいて来て、彼ら
とともに歩き始められた。

24:16 しかし、二人の目はさえぎられていて、イエスであることが分からなかった。

24:17 イエスは彼らに言われた。「歩きながら語り合っているその話は何のことですか。」
すると、二人は暗い顔をして立ち止まった。

24:18 そして、その一人、クレオパという人がイエスに答えた。「エルサレムに滞在して
いながら、近ごろそこで起こったことを、あなただけがご存じないのですか。」

24:19 イエスが「どんなことですか」と言われると、二人は答えた。「ナザレ人イエス様
のことです。この方は、神と民全体の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。

24:20 それなのに、私たちの祭司長たちや議員たちは、この方を死刑にするために引き渡
して、十字架につけてしまいました。

24:21 私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。実際、
そればかりではありません。そのことがあってから三日目になりますが、

24:22 仲間の女たちの何人かが、私たちを驚かせました。彼女たちは朝早く墓に行きまし
たが、

24:23 イエス様のからだが見当たらず、戻って来ました。そして、自分たちは御使いたち
の幻を見た、彼らはイエス様が生きておられると告げた、と言うのです。

24:24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、まさしく彼女たちの言ったとお
りで、あの方は見当たりませんでした。」

24:25 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たち
の言ったことすべてを信じられない者たち。

24:26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったの
ではありませんか。」

24:27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書
全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。

<説教>

十字架で死なれ、墓に葬られたイエス・キリストが三日目によみがえられる、復活なさ
ると信じ、期待した人は一人もいませんでした。イエスが直接そのことを予告なされたそ
の話を聞かされていた弟子たち、使徒たちでもそうでした。イエスの墓に行った女の弟子
たちがイエスのからだのなかったこと、彼女たちに御使いが現れて、イエスはよみがえら
れ、生きておられると告げたことなどを聞いた彼らでしたが、その話をたわごとと思ひ、
彼女たちの言ったことを信じませんでした(24:11)。彼女たちの話を聞いて墓に行ったペ
テロでしたがはやりイエスを見つけることなく、ただ驚いて帰っただけでした(12)。

そんな不信仰で希望を失っていた弟子たち使徒たちを、イエスは見捨てることをなさい

ませんでした。イエスがご自分の方から彼らに近づき、語りかけ、ご自身を現し、見せてくださいました。彼らの不信仰を嘆き、またかれらを叱責しつつ、彼らのうちにご自分が復活なさったことを信じる信仰を起こさせ、更に彼らをイエスの復活の証人として新しく生まれ変わらせ、この世に派遣してくださいました。そのことをルカはその福音書の終わりの方までずっと記しています。

本日の聖書箇所には、エマオという村に向かっていた二人の弟子に、よみがえられたイエスが近づき、ともに歩まれ、語りかけられ、聖書を説き明かされた様子が記されています。復活のイエスがご自分を初めて現わされた人物としてこのエマオに向かう途中の二人の弟子を挙げているのはルカだけです。

この二人の弟子たちがエルサレムから約 11 km離れたエマオという村に向かったのは、イエスが復活なさったその日でした(13)。二人は過越の祭りのためにエルサレムに来ていたのか、それより前からエルサレムにいたのかは分かりませんが、エマオにある家に帰って行く途中でした。二人は自分たちが信頼し、教えを見聞きし、つき従っていたイエスが捕らえられ、十字架につけられて殺されてしまったことで意気消沈していました。また仲間の女性たちの話で、墓にはイエスのからだではなく、御使いがイエスは生きてると告げたと知らされましたが信じることができず、いったい何が起きたのかと、全く混乱していました。それは二人だけでなく、使徒たちを含めた弟子たち皆がそうでした。そんな中でもうこれ以上皆であれこれ考えても埒(らち)が明かないし、ということでもう諦めて自分たちの家に帰ろう、ということになったのでしょうか。とは言え、二人の頭の中はイエスのこと、そしてイエスの身に起こった出来事のことについていっばいでした。道すがらの話題は当然イエスに関わる〈これらの出来事すべて〉になるほかありませんでした(14)。

そこに復活のイエスご自身が現れ、二人に近づかれ、二人とともに歩き始められました(15)。しかし二人にはその人がイエスであることは分かりませんでした(16)。

さえぎられていた〈二人の目〉(16)とは、もちろん器官としての目ではなく、いわば心の目のことです。このように、殊にイエスの十字架の死と復活について弟子たちの「心の目が見えない」状態だったことは以前から指摘されていたことでした(9:44-45, 18:31-34)。

イエスが語りかけると〈二人は暗い顔をして立ち止ま〉り、一人がイエスに答えました(17-18)。二人の弟子の間の「深刻で大事な」話にいきなり仲間でもない他人が不躰に割り込み、しかもその話題について何も知らず「話にならない」ことにクレオパは相当苛立ったようです。結構「とげのある」答えだったと思います(18)。

それに対してイエスが「どんなことですか」と言われると、二人が答えました(19-24)。

二人はイエスのみわざについて、またイエスに対する深い信頼、敬愛について、そしてイエスに対するユダヤの指導者たちの悪しきしわざについて率直に語りました(19-20)。そして改めてイエスに抱いていた大きな希望を率直に吐露しました(21a)。しかしそんなイエスが十字架につけられ殺されたことで自分たちの大きな希望は大きな失望、絶望に変わったというわけです。しかし驚きの知らせが三日目になって突然仲間の女性たちからあったというわけです(22-23)。またその女性たちの知らせが本当だったことが他の仲間によって確認されたというわけです(24)。もし女性たちの見聞きしたことが事実なら…、そして事実だということが確認されました…。ならば自分たちの絶望は一気に再び希望と喜

びにひっくり返るのですが…。でも生きておられるイエスの姿が見当たらないとなると…。やはりどこまで信じていいものかわからない。やはり絶望のままいるほかないのか…。希望と絶望の間で揺れ動き、心定まらない自分たちの心のうちを彼らは図らずも復活のイエスご自身に打ち明けたのです。

それに対してイエスもまた率直にはっきりと答えてくださいました(25-26)。あなたがたは確かに〈愚かな者〉であり、その愚かさとは、〈心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない〉ことだと(25)。〈預言者たちの言ったことすべて〉とはつまり〈キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだった〉ということです。このときの二人(だけでなく使徒たち、弟子たちすべてがそうでしたが)が特に信じられないでいたことは、キリスト(即ちメシア)が〈必ずそのような苦しみを受け〉るということでした。キリストが〈その栄光に入る〉ことはキリストとして当然のことと彼らは考えていました。だから預言者たちもそう言っていると。しかしその前に必ず(十字架の)苦難を受けるなど、〈イスラエルを解放する〉強いキリストには相応しくない、そんな弱いキリストなら自分たちは受け入れることができないと彼らは心頑なに考えていたのです。そんな〈愚か〉さ、〈心の鈍さ〉をイエスは叱責なさいました。

そんな厳しい叱責に続けてイエスは〈モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされ〉ました(27)。この場合の〈聖書〉とは今で言う旧約聖書のことです。旧約聖書の全体に、キリストが苦しみをお受けになること(受難)と栄光をお受けになることが書かれている、その通りのことが今実現したのだとイエスは彼らにお教えになりました。確かにイエスご自身がご自分の受難(十字架)と栄光(復活)について弟子たちに何度か予告しておられましたので、そのことを思い起こす必要がありました(6-8)。イエスのみことばを思い起こすことが復活の信仰の始まりというようなことを先主日に申しました。しかし今日明らかにされたことは、〈聖書全体〉が、言い換えれば旧約聖書に記されている神のみこころとみわざの歴史が、その神に対する、神の前での人間の(殊に〈モーセやすべての預言者たちから始めて〉)ということとなら、イスラエルの民の)思いと行いの歴史が、キリストの十字架の苦難と復活の栄光を語っているということです。

そういうわけで、イエスの復活を信じる確かな信仰は、新約聖書だけでなく、旧約聖書に記された神のみことばとみわざをも聞き、見て、イエスをよみがえらせた神の良きみこころと御力を知り、いつも思い起こすことから生まれるのです。